

キリスト教の三大祝日として降誕祭（クリスマス）、復活祭（イースター）、聖霊降臨祭（ペンテコステ）があります。クリスマスは、毎年12月25日と定まっていますから、内実はともかくとして、一般の日本人にもすっかり定着しています。しかしながらイースターは、春分後の最初の満月の次の主日（日曜日）と定められていて、毎年、移動する祝日となります。今年は4月21日でしたが、グレゴリウス暦を用いる西方教会の暦でいえば、3月22日から4月25日までのいずれかの主日に祝われることとなります。そのこともあってキリスト教国ではない日本では、クリスマスほどは定着していません。ペンテコステは、ギリシア語で「50番目」という意味を持つ語ですが、文字通りイースター当日を含めた50日後（7週間後）の主日に祝われます。つまりペンテコステもイースターに連動して移動する祝日となり、当然のことながら一般の日本人にはイースターに輪をかけてなじみの薄い祝日と言えるでしょう。

聖霊降臨とはいかなる出来事だったのでしょうか。使徒言行録2章1節～2節には「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。一同は聖霊に満たされ、「霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」と最初の聖霊降臨の出来事が報告されています。

確かなことはイエス・キリストの十字架、復活、昇天の後に、身をひそめるようにひたすら祈りに集中していた弟子たちが、聖霊の力を得てその沈黙を破り、この日を契機に様々な国の言葉で力強くイエス・キリストの福音を宣べ伝え始めたという事実です。ですからこの日は教会の誕生日、弟子たちによる力強い宣教活動の開始日として覚えられ、祝われるようになったのです。

最初の聖霊降臨の出来事を伝えるみ言葉を味わうたびに、静かな湖面に一つの石が投げ込まれ、その波紋が絶えることなく周りにどんどん広がりいく様子、はたまた将棋倒しの最初の駒が倒され、次から次へとありとあらゆる方向に近きから遠きへ、狭きから広きへ、細きから太きへ、うねりとなって駒が倒れ伏していく様子を想起させられます。その思いは紀元30年から1886年へ、エルサレムから仙台へ、大いなる時空の隔たりを貫き越えて宮城女学校の創立へと至ります。

日本人が見慣れている世界地図には、いつも日本が中心に据えられ、ひろびろとした太平洋がでんと居座り、大西洋は、両端に引き裂かれて描かれています。これが日本人のイメージのなかに刷り込まれている地図上の「世界」のはずです。もちろん、欧米における世界地図であれば、まんやかに大西洋が居座り、それを挟んで北米、中米、南米とヨーロッパ、アフリカが対峙し、日本は地図の右隅、文字通り“far east”に位置し、太平洋が引き裂かれて描かれることになるわけです。

ふと宮城女学校の創立者のホーイ先生や初代校長プールボー先生が、世界地図を念頭に置いて日本を思う時、どんな地図上の距離感を抱いていたのだらうと思ひめぐらすことがあります。実際に先生方が仙台に至るときに辿った旅路は、大陸横断鉄道と太平洋航路を用いて、ひたすら西進する道を選ばれました。しかし、合衆国北東部に位置するペンシルバニア州出身の先生方の脳裏に刻まれた地図上の日本は、実際の旅路とは異なり、大西洋を越え、ヨーロッパを越え、インド亜大陸を越え、中国、朝鮮を越えた先にある極東の日本だったのではないのでしょうか。

使徒言行録1章8節には、昇天なさる前のイエス・キリストが、弟子たちに向かって「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりではなく、ユダヤ、サマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と告げておられます。このみ言葉を読むたびにホーイ宣教師、プールボー宣教師の使命と自覚のなかに、まさに聖霊に導かれるまま「地の果て」としての日本へ赴かなければならないという決意が備えられていたのではないかと思います。今、この時の私たちに求められる大切な気づきは、宮城女学校の創立そのものが、聖霊降臨の出来事の実りにほかならないということに驚きと感謝をもって見いだすことではないのでしょうか。